

特集 心臓カテーテル検査・治療の 基本と業務の流れ



編集責任

滋慶医療科学大学院大学

加納 隆 KANO, Takashi

「心カテ室」は、以前は“心臓カテーテル検査室”と呼ばれ、心臓カテーテル検査中心の場であった。したがって、多くの病院では臨床検査技師がこの検査業務を担っていたが、私が在籍していた三井記念病院では、入職した1974年当時から“ME”（現在の臨床工学技士）がこの業務を担っていた。今思い起こすと、巨大なたんすのようなポリグラフ装置を造影室内に設置して使用するので、重い防護衣を検査中ずっと身に纏いながら、心内圧測定などを行っていた。当時の血圧アンプはゼロドリフトが大きく、測定ごとに手動でゼロバランスをとり直して記録しなくてはならなかったが、最も緊張したのは、検査後にきちんと記録がとれているかどうかだった。当時の心カテ記録は感光紙を使う電磁オシログラフだったため、現像が終わるまで記録の成否がわからなかったのである。その後、ポリグラフ装置は造影室外に設置して使用する「カテラボ装置」の登場でコンピュータライズが進み、記録器も電磁オシログラフからインクジェット式に替わり、さらにサーマルアレイ式へと替わっていった。また、心カテ室で行われることも、以前の検査中心から治療中心にシフトしていったことを反映して、病院電気設備の安全基準（JIS T

1022）では“心臓カテーテル室”が正式名称となった。このような流れのなかで、現在では多くの病院で心カテ業務を臨床工学技士が担うことになったわけである。

しかしながら、これまでの歴史的な背景もあり、臨床工学技士が本格的に心カテ業務に取り組むようになってから日が浅い施設が少なくないことも確かである。そこで、本特集では「心臓カテーテル検査・治療の基本と業務の流れ」というメインテーマで、まずは「最近の冠動脈治療の流れ」「心臓カテーテル検査の実際と評価」「経皮的冠動脈形成術（PCI）中の心電図・血圧変化とその対応」、ならびに「冠動脈疾患の診断に使用される装置」といった、臨床工学技士が心カテ室で業務を行ううえで必要な知識と技術の基本について執筆していただいた。さらに、「心臓カテーテル教育の実際」ということで、臨床現場で新人教育に携わっている臨床工学技士、ならびに養成校において教育指導している教員の立場からの執筆もお願いした。

本号が、心カテ業務に就いて間もない臨床工学技士の皆さんはもちろん、これから業務を開始しようとしている施設の方々などにも、幅広く役立てていただければ幸いである。